

京都大学	博士 (教育学)	氏名	鍛冶 美幸
論文題目	心理臨床における身体性の理解と実践		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、臨床実践における身体性について、力動的な視点から検討をおこなったものである。ここでは心理療法のみならず心理検査を中心とした心理アセスメントにも着目し、幅広い観点から論考を進めている。</p> <p>まず序章では、力動論に基づく心理臨床における身体性をテーマとした複数の先行研究をもとに、「感覚や情動の主体であり、またそれを通して環境や対象を知覚し関わり合う主体としての身体を活用するため、感覚や情動を身体次元でしっかりと受け止めることや、身体を通して表現すること」を、心理臨床における身体性 (embodiment) として定義した。著者の前論文では、様々な心理療法の学派を通じた身体性の検討を行っており、ここではそれをふまえて、身体性に関してすでに豊かな議論が行われている精神分析の視点を取り入れることとし、続く第1章において、精神分析各派における身体性の活用について概括した。同じ力動的視点から第2章では、「心理検査と身体性」をテーマとして取り上げ、心理療法を開始する際にロールシャッハ法を実施し、その後継続的な心理療法を行った3事例をあげ、同法の間運動反応の内容や、反応時の身体表現について、舞踊学領域で開発された動作分析法に精神分析的発達論を取り入れた動作分析ツールを用いて分析を行った。そこから、反応時の身体表現を通じて被検査者の検査時の自我機能水準がアセスメントされること、反応内容には潜在的な動作の志向性が投映される可能性があるため、その分析により潜在的な内的資質を予測できる可能性があることが示唆された。</p> <p>第3章から第5章では、心理療法の事例を取り上げ、そのプロセスから、それぞれ次のような観点から考察が進められた。第3章では、身体活動を中心としたダンス／ムーブメント・セラピー (以下 DMT と略記) を適用した事例から心理療法における言語と身体性の関連を、第4章では、言語的コミュニケーションを主とする通常の心理療法を素材として心理療法における身体性を「間身体性」と視点からそれぞれ検討を行った。心理療法場面で対峙するセラピスト (以下 Th と略記) とクライエント (以下 Cl と略記) 双方の身体性は、相互に影響を及ぼし合う。さらにその関わりの中で、新たな身体が産み出される。そしてその新たな身体はまた、Th と Cl 各々の身体性に影響を及ぼすと同時に、それぞれの身体性に支えられるという循環の中にある。従って、こうした関わりを治療的に役立てていくためには、Th には十分な感受性と柔軟さに加え、安定した自我境界を保持する豊かな身体性を備え、それを活用する技能が求められる。第五章「身体的共感と動作を用いた心理療法の試み」では、こうした豊かな身体性を備えた関わりが育まれる過程を明らかにするため、Winnicott (1971/1979) や Stern(1985/1989) が論じた、身体と精神との関係性に関する理論を頼りに検討を進めた。こうした展開を受けて、第6章では、Th の逆転移に着目した事例研究を取り上げ、Th が自分自身の思いがけない振る舞いや、身体的な違和感を身体的逆転移としてとらえ、その意味に思いを巡らせ、脱身体化に取り組むことは、言語的交流を含めた治療過程の進展に大きな意義をもたらすものという考察にいたっている。</p> <p>第七章ではここまでの総括を行うとともに、身体化から再び脱身体化によって、改めて意識次元で思考するコミュニケーションを成立させるための言語化の意義を論じている。最終章では、心理療法においてさらに身体性を探究していくための教育や訓練にも発展させた課題を示し、その意義を述べて本論文は結ばれている。</p>			

(論文審査の結果の要旨)

本論文の著者は、長年の心理臨床実践経験を経て、本学の臨床実践指導者養成コースに編入学され、これまで著者の研究テーマであった身体活動を中心としたダンス／ムーブメント・セラピー（以下 **DMT** と略記）の臨床心理学的意義やその効用に関わる研究を発展させた。新たな視点として心理療法の開始時に実施される心理アセスメントを身体性というキーワードと共に、どのように心理療法の展開が予測できるのか、また本コースであらためて学びを深めた精神分析学との統合をも目指したのもでもあり、心理臨床実践に大きく貢献できる研究を目指したものとなっている。こうして本論文は、精神分析的な心理療法における言語と非言語的コミュニケーションの理解と実践について、自験例をもとに丁寧に分析し、身体性を軸にまとめられたところにその特徴を持つ。また本実践研究のために、著者自身が心理臨床家として初心に立ち返り、本学で得た新たな眼差しで実践活動を見直したもので、当該領域での他の目標となる秀逸した研究であると評価できる。

その特徴は、次のような観点でまとめられる。第一に、これまで臨床心理学で心と身体との関係性について長年のテーマとなってきた問題について、いわば誰もが心理療法プロセスで抱いていた感覚をあらためて見直し、丁寧に先行研究をサーベイしたところにある。その知見をふまえ、ここで取り上げる心理臨床における身体性 (**embodiment**) について、「感覚や情動の主体であり、またそれを通して環境や対象を知覚し関わり合う主体としての身体を活用するため、感覚や情動を身体次元でしっかりと受け止めることや、身体を通して表現すること」と定義づけ、ともすると心の問題を身体化させているというマイナスのイメージに留まらず、積極的に身体を通じた表現について幅広く捉えていく視点を投げかけているところにある。

また、特筆すべき点として、本研究の展開手法に第二の特徴がある。それは、心理療法プロセスを素材として取り上げた第3章から第6章を、問題提起に対する例証として並列的に異なる次元で示す手法とは異なり、それぞれの討論から生まれた新たな問題点について、ステップアップしながら丁寧に精査していく流れを創っているところである。このことにより、心理臨床実践に生きる幅広い視野を持った展開がもたらされる意義をもたらす。まず、第3章での **DMT** を用いた心理療法を実施した事例から、心理臨床場面において言葉を通して情緒的な意味を持ち、象徴性を帯びた思考が展開する交流が生じるためには、身体性を基盤にした関係性の成立や、言葉が身体性を帯び体験全体を包含することが重要な意味を持つことが見出された。しかし、これはあくまでも身体活動を主とする治療技法から見出された知見と考え、第4章では、通常言語を中心とした心理療法における身体性の検討につなげていく。言語表現が困難なクライエント (**Cl**) に対してセラピスト (**Th**) が、身体次元の応答を続けるうちに **Cl** が、身体表現や言語化の力を発揮できるようになるプロセスがいきいきと描写されている。この体験を著者は、現象学的観点から自己と他者との身体に関わりに言及した、**Merleau-Ponty** の間身体性という概念を手掛かりに入念な考察を行っている。一方他者との間身体的なかわり合いは、治療関係における自我境界の曖昧性をもたらす、治療的混乱が生じる可能性をも精査することで、第5章で取り上げる治療的に有効な関わりをもたらす豊かな身体性とそれを活用できる **Th** の技能についてさらなる検討を進めていく。こうした流れは本論文の重要な展開を支えうる、極めてレベルの高い事例研究と評価できる。

第三には、心理アセスメント施行時の動作と無意識的な身体という、脳科学の知見をも含み込んだ検討を行うことで、無意識的な身体に現実の身体が影響を及ぼしつつあることに注目した斬新な視点である。こうしたアセスメント結果からもたらされた知見は、言語から身体化へさらに脱身体化から再度言語的なコミュニケーションへと、

その往還から心理療法が進展していくという提言につなげている。さらに、第二の特徴としてあげた第3章から第5章の事例研究を挟むことで、第6章で取り上げられる治療関係へ展開させていくことを可能にする。ここでの視点は、CIの表現する身体性だけではなく、Th自身の感覚としての身体性に開かれることで、身体を通して覚知するThの逆転移にも着目できるというものである。この展開から、心理臨床実践研究を十二分に活かし、極めて独創性のある論文と評価できる。これらの特徴を最後の総括では見事にまとめ上げ、本コースでの学びを通して理解を深めたスーパーヴィジョンへの提言もおこなっている。

試問では、いずれの調査委員からも、言語と非言語、そして身体性にかかわる問題に対して心理臨床実践現場からの問いに端を発し、丁寧に事例研究を中心にまとめられた労作との高評価を得た。また情緒と一致する言葉という次元と、身体性というのはどのように異なるのか、象徴化との関係性はどのように考えるべきかといった議論がなされた。そして本論文で取り上げている身体化、脱身体化というレベルは、認知と情動といった次元と複雑に絡み合っているのが心理療法であり、それらがステップとして果たして区別できるのか、それとも交差しながら進めていくものかといった極めてレベルの高い議論がなされた。この試問において、著者と調査委員は共に同じ専門家として、意義深い議論が交わされていった。それゆえ、こうした議論は、本論文の価値を損なうものではなく、むしろ、今後の著者のさらなる臨床実践活動、指導者としての活動に重要な視点をもたらすものであり、この議論こそが、心理療法の意義について心理臨床家が熟考していくべきプロセスと思われた。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和2年2月19日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定)当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降